

『考える歴史の授業』上・下

加藤公明・榎澤和夫・若杉温編

地歴社／2019年8月／各2300円（税別）

原始・古代から現代まで約60の授業テーマが取り上げられている。それぞれが実際の授業記録であり、自分だったらどういう授業になるだろうかとインスピレーションを掻き立てられる素材が揃っている。書名の通り、歴史を子どもが考えるための教材があり、それに対応した問いがあり、子どもの回答に基づいた意見交換が記載される。ただ話し合せているだけではなく、歴史認識の深化が端々に見受けられる。取り入れてみたい実践が時系列で並んでいるので、明日の授業をどうしようと焦っているときでも、すぐにヒントを得られるだろう。

『承久の乱』

本郷和人

文春新書／2019年1月／820円（税別）

いま歴史が熱い。これまでの通説という、「偉い学者がこう言った」「史書にこうある」という類のものが多かったような気がする。

それが今「本当はどうだったんだろう？」と、当時のリアルを求める動きが急激に盛んになり、ここかしこで興味深い新説が続々と登場している。筆者は、その嵐を起こしている一人であろう。

筆者も言っていて「我が意を得たり」と思ったのが「リアルの探求は疑問を持つことから始まる」だ。本書でいうと、後鳥羽上皇は政治・経済・軍事上で卓越した才能を持っていたのに、なぜ敗れたのか。それは、挙兵当時全く勝ち目がなかった源頼朝がなぜ勝利できたのか、という問いにつながり、筆者曰く「日本史上最大の転回点」につながっていく。

『日本が売られる』

堤未果

幻冬舎新書／2018年10月／860円（税別）

衝撃の書。心して読まれたい。いま、水が、農地が、森が、海が、売られている。・・筆者によれば「四半期利益でものを見る『今だけカネだけ自分だけ』の浅はかな政策」によって。それでボロ儲けしている国内外の人々も実名で登場する。

LINE 初心者の小稿子は、インストールした途端に「おともだち」が100人以上出現して仰天したが、そうになってしまう理由と、悪用される事件のことも、本書を読んで納得した。

『中島敦の朝鮮と南洋』

小谷汪之

岩波書店／2019年1月／2400円（税別）

国語の教科書で『山月記』が載っているの、国語の授業とのコラボレーションが期待できるかと思いに取った。その思いは実現が難しそうだが、本書は日本人による南洋諸島の支配の姿が丁寧に描かれている。植民地支配とは何かを生徒に考えさせるのには良い教材となるだろう。「未開」の地に住む人々を蔑み、差別する心が、日記等に表現される。そもそも南洋諸島を事実上の植民地として支配していたことが歴史の教科書に出てくるのは一瞬である。そのことが我々を、過去の植民地支配についての歴史認識から遠ざけているのかもしれない。

『宿命 習近平闘争秘史』

峯村健司

文春文庫／2018年6月／940円（税別）

著者は気鋭の『朝日新聞』国際報道部記者で、「愚直なまでの現場取材」と卓越した筆力を駆使して、「権力闘争」という視座から近年の中国（共産党）内部の実情を余すところなく抉り出している。2018年の憲法改正によって国家主席の任期を撤廃することに成功した習近平であるが、習は「自ら退くことは許されず、毛沢東になることを宿命づけられている」存在と著者は位置づける。世界第二の経済大国となり、今や様々な分野でアメリカとの覇権争いを演じるまでに躍進した隣国の内情を知ることができる好著である。国内外でベストセラーとなった単行本『十三億分の一の男 中国皇帝を巡る人類最大の権力闘争』（2015年／小学館）に大幅に加筆修正が加えられたのが本書である。

『<いのち>とがん』

坂井律子

岩波新書／2019年2月／820円（税別）

副題に「患者となって考えたこと」あるように、NHKのディレクターなどとして番組制作の最前線で長らく患者を取材する側にいた著書が、逆にかん患者の立場に立たされて初めて実感した「いのち」を巡る諸問題に関する赤裸々な記録である。約2年間の休職後の職場復帰直前に再々発を宣告され、「病気になった自分と、伝える仕事をしてきた自分との接点で、いまなし得ること」として、飾り気のない日々の営みが綴られている。